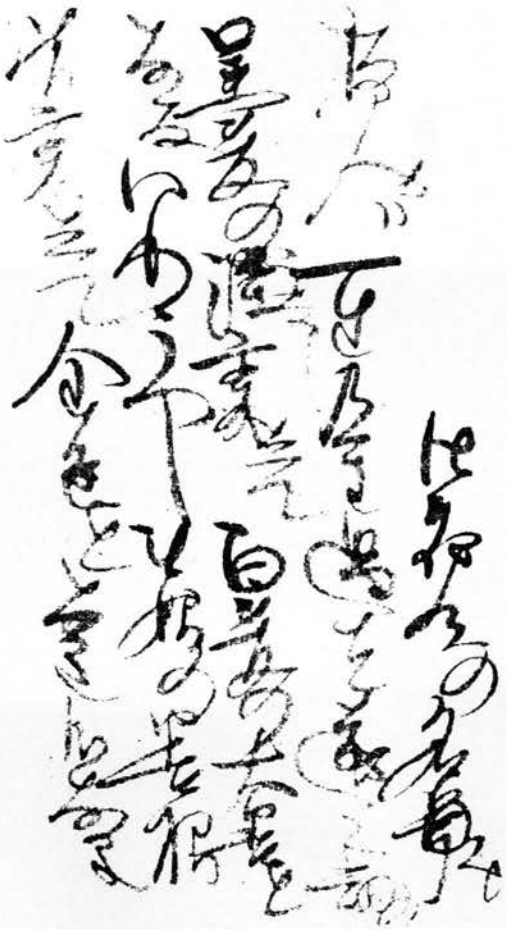
今月の御聖訓



法華経の名号を持ッ人は、一生乃至過去遠々劫の黒業の漆変じて白業の大善となる。いわうや無始の善根皆変じて金色となり候なり。

【妙法尼御前御返事　全集一四〇五頁】

目　　次

今月の御聖訓

お講講話 十四誹謗と慢心 …… 菅野憲道 1

天地つかの間〔その㉖〕 …… 成田詳道 8

続・日興上人御本尊調査記録〔6〕 …… 山上弘道 9

家を守る話〔その一〕 …… 松井照雄 11

ちょっと寄り道㉖〈小さな看板〉 …… 森田観道 12

《宗祖日蓮大聖人御大会式を奉修》 …… 13

フォト・アイ〈御会式〉 …… 14

御会式布教講演〈妙法の智水を受持し伝えよう〉 …… 山崎潤道 16

読書案内『われ以外みなわが師』 …… 松田銘道 20

恵日だより …… 21

十二月の行事　師走詠草　恵日俳壇

表紙写真撮影：松井義信氏　題字：立正安国論より拝写

お講講話（要旨）

拝読御書　「松野殿御返事」（全集一三八二頁）

十四誹謗と慢心

菅野憲道

今月は、日蓮大聖人の仏法を信ずる者として、初歩的な心構えを、「松野殿御返事」を通してお話したいと思います。

《法華経の心に背いて唱える題目》

法華経によれば、妙法蓮華経を受持信行する福徳は無量であり、あらゆる仏様の功徳の源泉であると説かれております。それゆえに、信心修行する者の地位や肩書、家柄や性別に関係なく、たとえ何なる悪人・愚人であっても、誰でもがこの妙法蓮華経によって成仏がかなうのであります。

ただし、この仏法が万人に等しく無量の功徳をもたらすものであっても、受けとめる側が背を向けていては、その功徳も画に書いた餅にすぎません。「松野殿御返事」に、

「愚者の持ちたる金も智者のもちたる金も、愚者の燃せる火も智者の燃せる火もその差別なきなり。ただし、この経の心に背いて唱えば、その差別あるべきなり」（全集一三八二）

と説かれておりますように、口先だけのお題目、形だけの信心では功徳はないのであります。

その受け止める側ですが、法華経をはじめ多くの経典には、我われ現代の人々を、「三毒強盛」「我慢偏執」と説かれております。実際、だんだん宗教心や道徳心が薄れてきて、種々の欲望は強く、慢心も強くなる傾向にあるようです。

とくに、人間が高度な技術力を持つにいたって、自然を征服したかのような錯覚を持ち、神仏にとってかわって、自分たちがこの宇宙の主人として支配しているような慢心の傾向が強くなったようです。こうした傾向が環境問題などで因果応報の酬いを受けているといえなくもありません。

人間は本来この悠久の大宇宙の、広大無辺の大生命体の中から、生じ、生かされている微少な存在でありますから、そのような永遠なるものへの畏敬の念、不思議にみちている自然界への謙虚さこそ忘れてはならないのですが、人工的な環境や人為的な社会の中に生きていると、ついついこうした視点を忘失して、自分が中心であるかのように思うのでしょう。また現代社会では、総体に個々人の自我意識が強くなって、無意識のうちに増上慢の心も強くなっているようです。

このような現代人の傾向に照らしてみると、末法においては法華経を信ずることが大変困難だというのもうなずけます。もともと信仰心が薄い上に、たまたま法華経に縁しても、自身の内面に巣くう増上慢の心と、世間の人々の慢心が正法受持を妨げるからであります。

とくにやっかいなのは自身の増上慢なのではないでしょうか。方便品にはこの増上慢のことを「未だ得ざるを得たりと思い、未だ証せざるを証せりと思う」と説かれていますが、それがここでいう「この経の心に背いて唱える」ということであります。

大聖人は、ここでは、法華経譬喩品を引いて十四の謗法の原因を説かれております。

「又舎利弗 憍慢懈怠 我見を計する者には 此の経を説くこと莫れ、凡夫の浅識 深く五欲に著せるは 聞くとも解すること能わじ、亦為に説くこと勿れ……」（開結二四〇頁）

すなわちすべての法華経の信行者が、在家出家ともに誰もが犯しやすい謗法として、十四種の業因をあげておりますが、その筆頭が「憍慢」即ち増上慢なのであります。

法華経の心に背くこれらの謗法を犯さないように自戒しなくては、いくらお題目を唱えてもまったく功徳が無く、むしろ大きな罪を作ることになるというのです。これが、いわゆる十四誹謗であります。

《十四誹謗——憍慢》

順に申しますと、第一に憍慢。やはり我われが一番気をつけなければならないことが憍慢ということだと思います。これは慢心とか増上慢ということですが、これについては諸御書で説かれておりますし、勧持品には三類の強敵といって、俗衆増上慢、道門増上慢、潜聖増上慢といって、いずれも在家、出家、高僧などにあらわれる増上慢の姿を示し「**悪世の中の比丘は邪智にして心諂曲に、いまだ得ざるを得たりと思い、我慢の心充満せん**」とか「**後の悪世の衆生は善根転た少くして増上慢多く、利供養を貪り不善根を増し、解脱を遠離せん**」というふうにも説かれてます。

憍慢ということを考えてみますと、人はたいてい「自分は良い人間である」と思ってます。たとえ悪事を働いて前科十数犯のような人でも「しょうがなくてやったので、本当の自分はそんな悪い人間ではない」と思っているそうです。このように自己愛という本能が、自分という人間の現実をゆがんで認識させて、「自分は良い人間」だと思いこませるのです。しかし、現実を冷静に観察してみると、我われ平均的な人間はどちらかというと善事は少なく悪業が多いのが普通ではないでしょうか。

しかもわずかな善事や少々の成功でもあると、知らず知らずの内に増上慢を起こし、他の諫言も耳にいれなくなりがちです。そうなりますと道を求めるどころか、謙虚に人の意見を聞くことがなくなってしまいます。たまたま人から注意されても腹を

立てて、かえって逆襲したりします。慢心の強い人ほど自我を傷つけられやすくなり、そのために「馬鹿にされまい」というような自己防衛の心持ちが必要以上に強くなり、攻撃的になるのです。

もう一つには、自動車にはブレーキがあるように、人間には良心の呵責、とか自責の念を持っているのですが、増上慢の心があるとこれが働かなくなってしまいます。自己中心的な命は他人の苦痛や悲しみには鈍感となり、本来持っている心の制御装置が働かなくなってしまいます。そのため悪いことをしても、済まないことをしてしまったというブレーキが働かず、何度も悪業を重ねてしまうのです。人間も心の中にアクセルだけでなく、ブレーキを持つことが大切なのです。正しい信心、良心、道徳心、罪悪感という自己を律するブレーキがあることによって、破滅から救われているのであります。

また、日々生きる上でやむなく犯さざるを得ない罪障や知らず知らずに犯した罪業も、懺悔滅罪・罪障消滅を願うことは、成仏をめざす上で最も大切なことですが、これもまた慢心があっては為し得ないことです。

そのほか慢心があるということは、人によく見られたいとか、体面や世間体を意識する心が強く、常に演技して生きてしまうのです。自己を美化し、自己を装うことに忙しく、本当の自分、現実の自分を見ようとせず、幻想の中に閉じこもります。

文句記に「珉を蔵くし徳を上ぐるは上慢を釈す」といって、慢心は一種のナルシズムであり、自己反省の心もなく、自己を正当化しようとします。

また、その演技のために、精神的・肉体的に多くのエネルギーを費やしますから、自分の本心を忘れ、心も上の空で人生がいつでもその場しのぎの虚飾に満ちた生き方しかできません。

《我慢偏執の心》

つぎに、よく世間で「我慢」という言葉を使いますが、この言葉は本来「うぬぼれ」「思いあがり」「おごりたかぶり」「慢心」という、人間の苦しみのもととなる煩悩を意味する仏教用語なのです。

仏道修行というものは、さまざまな忍耐をしいられますが、それが自己中心的な人ですと、思い通りにならないため、つい腹を立てて途中で止めてしまいます。それを「これは自分のわがままだ」「自分の慢心だ」「我慢だ我慢だ」といっていたことが、いつの間にか逆転して、忍耐＝我慢という意味になってしまったのです。

ここからも分かるように、自尊心や虚栄心の強い人ほど、馬鹿にされたり、けなされたりすると傷ついて信心修行を止めてしまうものです。また、おだてられたり誘惑されることにも弱く、虚栄心をくすぐられるとスグに我れ賢しとばかりに舞い上がって、簡単に魔の軍門に下ってしまうのです。そのために慢心こそ仏道修行の大敵なのであります。

ところで、法華経が説かれるに当たって、方便品の開三顕一の法門がまさにこれから説かれようとした時に、大半の聴聞衆がその座を立って去ってしまったことが説かれております。この事件を五千増上慢比丘の退座＝五千起去といいますが、これ

はきわめて暗示的な意味を持っております。

すなわち、この法華経こそ仏の随自意の法門で、増上慢の心を持った衆生にはとうてい信解できないものであることを意味しているのです。

「如説修行抄」によれば、「法華経は、衆生の迷いの心に従って、衆生が喜ぶような迎合的な説き方はされておらず、仏の本意をそのまま直ちに説くので、五千起去というようなことがおこる」とされています。そのために、いくら法華経が一切衆生成仏の直道であっても、自己の小さな悟りに執著したり、うぬぼれて求道心を失った者には、仏自から証得された無上の大法を素直に聞く耳が無いのです。すなわち「憍慢の山の頂には仏法の智水は留まらず」といって、慢心こそ仏法の大敵なることを象徴しているのであります。

言いかえれば、法華経の信仰に入る道は、なによりも我慢偏執の心を捨てること、仏法のためには身命を惜しまない心にあるということなのです。

《懈怠》

次に懈怠とは怠けることです。勤行を怠けるとかいう身体的な意味もありますが、ここではむしろ精神的な意味での懈怠であります。懈怠とは自分の心の中において生じるものであります。「人生とは何か」「何のために生きているのか」「生とは、死とは何か」等という人生の一大事を、うやむやにしたままにして、枝葉末節の煩瑣なことにのみ日を送っている姿こそ怠けている姿なのです。また本来ならば悪いことをしたり、謗法を犯せば、心の中で良心の呵責を受けなければならないのですが、それは苦しくて不愉快なことだから、それを適当に理屈をつけてごまかしてしまう。

例えば日常でも何か大きな悩み事があって、ムシャクシャすると、酒にのがれるとか、パチンコで気晴らしをする等、忘れようと努めますが、それでは本当の解決の道にはなりません。やはりその苦しさとか重みに耐えてこそ、人間は成長できるのです。

このように本来は心にしっかりと受けとめねばならない罪業を、耐えずにごまかして逃れようとするのは、怠慢・懈怠になるのです。

面倒臭い、苦しいからといって一時的に逃れても、そのツケは必ず払わされるのです。面倒なこと、辛いことでも少しづつもつれた糸をほぐすようなつもりで根気強く立ち向かうことが修行なのであります。

阿部宗門や創価学会などは、長い間に生じた教学的矛盾とか組織の問題、信仰上の疑問を、「どうにもならない」とか「上の者のやることで自分には関係ない」といって怠けてしまったために、あんなふうに堕落してしまったのだと思います。

実際には一つの組織とか集団に所属していれば、組織も生きているのですからいろんな問題が生じてきます。本来はその時々に問題意識を持って、「なぜそうなったのか」、「どうすべきなのか」と、一人一人が主体的に組織を構成する者の責任において考えて行動しなければならないのですが、それを放棄してしまい、すべてを組織に依存してしまう。自分のこと、目先

のことばかりを考えて楽な方に逃げるのが懈怠謗法なのです。

《計我・浅識》

三番目には計我。我を計るとは、自己中心的に物事を見る、自分の尺度で他を計るということです。御書に「十四誹謗の心は文に任せて推量あるべし」と仰せのように、だいたい想像していただいたら解ると思います。

四つめの浅識とは、仏法のことについて、少しかじったら解ったような気になるということです。例えば音楽や絵画、あるいは文学などにしても、我われには作者の深い意図は分からないことが多く、表面的に通り一遍のことしか理解できません。夏目漱石の「坊ちゃん」などにしましても、我われはただ面白いぐらいにしか感じませんが、読むべき人が読めば、わずかな文章にも人生の深い命題や、哲学的な考え方が分かるのでありまして、文芸批評などを読みますと、なるほどそんな深い意味が隠されているのかと気づいたりするのであります。

夏目漱石

ましてや仏法について、我われは大聖人の深い御意をいくらも知ることができませんが、御書の一部を読んだりしますと、何か大聖人の教えが分かったような気になって、うぬぼれの心が起こってきます。「新池御書」に

「末代の衆生は法門を少分こころえ、僧をあなづり法をゆるがせにして、悪道におつべしと説き給えり」

と誡められております。

《著欲・不解・その他》

五番目の著欲。これはお経文に「放逸著五欲 堕於悪道中」とありますように、目先の欲望に執著ばかりして、法華経を信ずることができないもの。

六番目の不解とは法華経の本当の素晴らしさを解せないもの。

七番目には法華経に対する不信。

八番目に顰蹙。顔をしかめることを顰蹙といいます

九番目に疑惑、それから誹謗。仏法に対する疑いとか惑い、また仏法を毀ることです。

その後に続く軽善、憎善、嫉善、恨善。善事を軽んずること、人の善行をみて小馬鹿にしたり軽蔑する、そういう心を持っているとやがて善行を憎むようになります。

人心の乱れた職場等では、まじめに一生懸命に働く人が悪く言われたりすることが良くあるそうです。怠けている人がやりづらくなって、その人を憎み、嫌みを言ったり足を引っ張ったりして、あまり働かないようにさせるのだそうです。さらにそれがひどくなると、善行に対する嫉みや恨みにまで伸展してしまうのです。

いまの創価学会と宗門の紛争でも、ほとんど「坊主憎けりゃ

袈裟まで憎い……」というような憎悪の感情に溺れて、手当たり次第攻撃し、結果として法華経・大聖人に疵をつけていることも知らず、下劣な品性をむきだしにしていがみ合っております。両者の機関紙などを読んでいますと、慈悲の精神など微塵もなく、あるのは独善と怨念ばかりが感じられるのであります。

《組織・集団としての謗法》

我われが仏道修行を行おうとする時には、必ずそれを邪魔しようとする働きが、自己の内外とも出てくるのです。そういうものが十四の謗法として表現されているのだと思うのです。しかもそれが、個人のレベルだけでなく、組織や集団としても現れてくるのです。「謗身」「謗家」「謗国」ということが御書にも出てきますが、謗法や悪事というものは決して一身に止まるものではなく、教団とか集団ないしは社会全体で行われることがいくらでもあります。

いなむしろ一個人であったならば、とうてい犯し得ないような悪事でも、集団になると簡単に犯してしまうのです。個人であれば、普通の人はどこかに良心というものがありますから、悪事を働いて平然とはしていられない。これが組織集団になりますと、各自の担っている部分が専門化してきますから、全体の悪が見えません。また自分は上からの指示で行っているんだという気持ちが強く、責任を感じないですむ。実際に自分が手を下した悪事でも、命令した人に責任転嫁することもできます。組織全体の大きな目的のためには少々の悪事もやむをえないという正当化の論理もなりたちます。

オウム真理教の事件も、まさに組織悪の象徴のようなものです。組織は多くの人間が形成するものですから、組織の体質はむしろ人間の諸の醜悪なもの、煩悩などを集約した形で表れてくると思うのです。共通の利害などで一致しやすいので、理想論よりは現実主義が主導権をとりやすいのです。しかも集団全体でやっていることで、自分は大勢の中の一人ですから判断は全体にゆだねることになり、思考停止という状況が起こりやすくなります。その上、集団には似たもの同士が集まりやすく、機関紙などで絶えず自画自賛し、歌まで作って自分たちの組織がいかに素晴らしいかと美化し、絶対化してしまうのです。

もちろん人間が生きていく上で組織が必要不可欠なものです。しかし、欠点のない人間などいないように、欠点のない組織などあるわけがないのです。その組織を絶対化することが誤りなのです。ところが組織は個々人の意志とは関わりなく、組織全体としての一定の意志を持ちます。常に個人を同化し、統一するために、自己宣伝を繰り返しますから、国家でも、会社組織でも、宗教団体でも自己を絶対化し、美化しがちで、ある種のナルシズムに陥ってしまうのです。それがだんだん浸透していきますと、独善となり腐敗していくのであります。

「仏意仏勅の団体」「清浄無比の団体」「仏祖已来嫡々相伝の宗門」「地上最後の楽園」等、何れも自己の組織集団を客観的・相対的にとらえる冷静な視点を失った、慢心集団の妄想に他なりません。

《己心の魔に負けないように》

このように謗法ということは個人のレベルでも、集団のレベルでも、いつでもあることですから、自分の中にも、自分の所属する組織のなかにも、謗法は内在しているということを自覚し、たえず自己点検がなされることによって初めて正しい信心が保証されるのであります。また内なる罪障を自覚することではじめて懺悔滅罪もできるのです。

「御義口伝（方便品）」の「比丘比丘尼　有懐増上慢　優婆塞我慢　優婆夷不信の事」の中に文句の四を引いて、

「上慢と我慢と不信と四衆通じて有り。但し出家の二衆は多く道を修し禅を得て謬って聖果と謂ひ偏に上慢を起す。在俗は矜高にして多く我慢を起す。女人は智浅くして多く邪僻を生ず。自ら其の過を見ずとは、三失心を覆ふ。疑を蔵くし徳を揚げて自ら省ること能はざるは是れ無慙の人なり。若し自ら過を見れば是れ有羞の僧なり」（全集七一八頁）

と、増上慢・我慢偏執・不信の心は在家・出家ともに等しくあり、どちらかというと出家の場合は、ちょっと行学を積んで偉くなったような気になり、増上慢を起こしがちになる。在家の場合は、名聞名利から我慢偏執の心を起こす。また女人は肉親の情に溺れて、偏った小さな了簡で誤りを起こす。自分では自分の欠点が見えませんから、結局増上慢と我慢の心と不信の心を覆い隠してしまうことになるのです。

自分の欠点を隠して、うぬぼれ自慢する人、こういう人は無慙の人、恥を知らない人である。逆に自身の欠点を客観的に見れる人は有羞の僧（恥を知る真実の僧）だといわれております。

世の中、他人の手柄は自分のことのように言い、自分の失敗は他人のせいにするというような人が多いのですが、これをまったく逆にすることが法華経の信心の姿であるというのです。

ですから法華経の信仰で一番大切なことは、まず慢心を捨てること。自分が偉くなろうとか、良いカッコしようという不純な動機があれば、それは法華経の心ではありません。

自身がなにか利益を得るためにするのではなく、他人のために尽すことで自分も救われる浄化されるのですから、先ず最初に自分の利己心や慢心を排除し、とにかく一心に仏法に帰依することが、根本になると思うのです。

何れにしましても、我われは煩悩深重の未断惑の凡夫として、謙虚な自覚の上に信心修行にとり組むことが肝要であります。少々題目を唱えたからといって慢心を起こし、己心の魔に負けないように、ご精進を願いたいものであります。南無妙法蓮華経。

お会式の始まりを待つ源立寺山門

天地つかの間〔その二十六〕

成田詳道

宗門機関誌「大日蓮」で、群馬県渋川市の浄法寺住職・村井穏道師の訃報と、葬儀のようすを知った。宗門が二分してから、多くの諸師が鬼籍にいり、いつも後日にこれを知るが、穏道師は出家得度が同時期で、感慨ひとしおに思う。と言っても師は七十三歳だから、私より三十歳あまりの年長である。

昭和三十九年、大石寺に今は無き大客殿が落慶の春、私たちは出家した。七月には富士山頂に気象レーダー設置、十月の東京オリンピック開催をひかえ、大阪・東京間に東海道新幹線を開通させ、文字通り高度経済成長で夢心地のころだった。

私たち少年得度者と、穏道師たち一般得度者とが、ともに十七人で、食事当番の巡り合わせが、いつも穏道師と一緒だった。穏道師は当番で集まる私たち三人の中から、とくに勉強と品行の良いE君だけを陰に呼び、「E君、勉強がんばってるから」といって、お菓子を与えていた。

それを出来の悪い私とK君は「E君ばっかりミコして……」と、横目で不満に思っていた。富士宮では「えこひいき」をなぜか「ミコ」と言った。辞書を引くと「見込む」の意味のようで、とくに目をつける、有望であると思うこととある。ナルホド確かに私とK君は有望ではなかった。

だから穏道師には正直言って、いやなおじさんといった印象がある。だがそれを根にもって、書くのではない。訃報の写真に師の人生、とりわけ僧道の三十三年間が想像された。

安立阿闍梨穏道房日見大徳
行年七十三歳

宗門や学会の躍動変転期に、押し流される木の葉のように、法要や御授戒をつとめ、流れついたら宗門と学会は敵対し、口汚く罵り合う両者の間にあって、師は阿部宗門の正当性を信じながら、亡くなっていったのだろうかと。本当に信じていたのなら、少なくとも自身は幸せだったかもしれないと。

私はヒマと好機があったら、宗門側の全僧侶に尋ねてみたい。貴方はいま自分の僧道に納得していますか、阿部師を本心から崇拝しているのですかと。もちろんこれは正信会にも跳ね返る諸刃の剣であるが。剣豪・宮本武蔵は「わが事におゐて後悔をせず」と言い切ったそうだ。我々のは「後悔を先に立たせて後からみれば、杖をついたり転んだり」の志ん生流である。

人はみな人生をやりなおせないし、今を再び体験できないこと昨日のごとしだ。でも嵐の過ぎ去る時期と、自分の死期とどちらが早いか、誰にもわからない。

死の直前になって、自身の人生に悔いを残しては、浮かばれない。富士門流の僧侶ならば、僧道において大聖人、日興上人の教えに、違背がなかったかどうかを、等閑にはできない。

報道には住職に就任以来「本堂・庫裡の増改築、墓地の開園、法華講の結成・育成にと多大な功績を残され」て、安立阿闍梨穏道房日見大徳という立派な戒名が披露されていたが、これは他人の評価で自身のセリフではない。同じ時期に違う軌跡を選んだ者として、師の本心と本音が聞いてみたかった。

（源立寺執事）

続・日興上人御本尊調査記録〔六〕

山上弘道

〈平成九年八月十七・十八日
佐渡　世尊寺・妙宣寺・
本光寺・妙満寺調査〉②

【世尊寺】

世尊寺所蔵の日興上人御本尊については、既に調査をさせていただいている。時間をかけて調査させていただいたお陰で、寸法・脇書等前回に異なるところはなく、また裏書きその他の新たな発見もなかった。データについては先に『日興上人御本尊調査記録』（広宣寺寺報『聖道』一九九六年七月号〈通巻一〇三号〉一七頁）で詳しく紹介しているので、煩を避けてここでは再掲しないこととする。但し弘安三年十一月日の日蓮大聖人御本尊について若干のコメントがあるのでデータと共に紹介しておく。

一、日蓮大聖人御本尊
　　弘安三年太歳庚申十一月日
縦五九・一cm（今回調査五九、六cm）
横三九・四cm（今回調査三九・三cm）
授与書「比丘日法授与之」
日興上人添書「紀伊國切目刑部左衛門入道相伝之　子息日然譲与之」

寸法については『日蓮聖人真蹟集成』本尊集解説によれば、尺貫法で計ったものをセンチに換算しているようなので、この程度の誤差は問題がない。日興上人添書については同解説に「子息沙弥日然譲与之、とあるようだが（『要集』の堀日亨師の解読によったものであろう）、判読が困難である」旨が記されている。しかし今回の調査で極めて不明瞭ながらそれを確認することができた。但し次の二点を指摘しておきたい。第一は不明瞭ながら「沙弥」の二字はないと思われること。第二に「紀伊國切目刑部左衛門入道相伝之」と「子息日然譲与之」を『要集』（八巻二一六頁）では「……左衛門入道之を相伝し子息沙弥日然……」と両者をつなげて読んでいるが、墨質等の違いが認められるので冒頭示したように切り放して読むべきことである。恐らく刑部左衛門入道に相伝された後、入道の死去など何らかの理由で日を経て子息に日興上人が譲与されたものであろう。

【妙宣寺】

妙宣寺の御虫払いは午前十一時からである。その為朝から始められた世尊寺での撮影作業は十時にいったん切り上げた。妙宣寺さんには一応、撮影に最低必要な六畳ほどの空間をお借りしたい旨を

世尊寺での調査風景

手紙でお願いしておいたが、その了解はまだ戴いていない。当方も御虫払いがどのように行われるのか、その間どのような段取りで撮影させていただけるのか皆目分からない。そこで取りあえず時間前に源立寺さんにご同行願って、二人で妙宣寺に伺い段取りを確認することにした。

妙宣寺は世尊寺と目と鼻の先にある。受付に行くとタイミング良く奥から住職が出てこられた。さっそく調査撮影を許可していただいた御礼を述べ、撮影についての段取りを確認すると、時間は指定したとおり十一時から午後二時まで、法要はないから時間いっぱい作業をしてよろしい、作業は本堂左側の部屋で行ってよろしい、その際本堂右にお掛けした御本尊を一幅づつお移しして撮影することとし、けして複数をお移ししないようにとのことであった。御虫払い中とあっては何かと制約もあろうかと覚悟をしていたのだが、これなら充分しっかりとした作業ができる。胸をなでおろしながら慈仙院に戻ると、池田師・成田師・原田師が到着していた。これで全員集合である。

十一時、住職に改めて全員でご挨拶をし、執事さんに案内されて本堂に入ると右側の部屋奥に、遠目でも一目でそれと解る日興上人御本尊がずらりと奉掲されている。思わず息をのむ。一昨年は断られた。去年は内諾は戴いたものの妙宣寺さんの都合がつかず持ち越しとなった。そして今、間違いなく日興上人御本尊を眼前に拝している。こみ上げるものを押さえながらさっそく作業にとりかかる。

三枚継の御本尊から一幅ずつ丹念に書誌を取り、カラーと白黒で撮影する。部分写真は時間的に6×7（ロクナナ）で撮ることができないから、三五（さんじゅうご）ミリでカラーを菅原師、白黒は坂井師が撮る。三枚継御本尊と一紙御本尊を大別して撮影するのは、あらかじめの練習で迅速に作業を進めるために発見した方法である。つまり今までは一幅一幅その大きさに随ってカメラを上下に動かしていたのだが、上下させる度に微妙な左右の誤差が出て、再びまっすぐに御本尊に正対させるのに時間がかかってしまうのである。そこでカメラはそのまま動かさず御本尊の方を上下させる工夫をしたのである。こうするとカメラは大まかに三枚継用の位置と一紙用の位置とを定めればよいので、一回の移動で済む。下道師・原田師が即席コンビながら流れるように、カメラを覗きながら指示する泰雄師の言葉に随って位置を定めていく。泰雄師も6×7カメラのデビュー戦ながら信朝師と共に大役をこなしている。成田師・大黒師はデータどりや脇書の確認に余念がない。池田師と私は奉掲されている御本尊を透かしてみた

り全体的なチェックをする。源立寺さんは奉掲されている重宝ばかりでなく、巻物や書状などを丹念に調べている。その中から天正年間の紺紙金泥銀罫の法華経十巻を見い出され、妙宣寺さんにその保存状態の良さも含め美術的価値の高いものであることを説明すると、妙宣寺さんは思ってもみなかったことのようで大変驚きもし満足げでもあった。

許可を得ている日興上人御本尊の調査撮影がほぼ完了に近づいたとき、せっかく作業も順調に進んでいるし、このようなチャンスはそうあることでもないので、ダメモトで許可を受けていない日興上人筆の日満師への二通の補任状、更に日満師御本尊三幅の撮影をお願いした。住職は、あぁ、それも日興上人関係の資料だからね、どうぞお撮りなさいと即座に許可して下さった。作業も無事に終り機材を片づけふと時計を見ると二時十分前。正直なところ夢中になっていて時間をあまり気にしていなかったのだが、まさにどんぴしゃり。チームワークも作業内容もほぼ完璧であった。調査した資料のデータは次の通り。（次号につづく）

「蔵の財よりも身の財すぐれたり。身の財より心の財第一なり。」

（全集一一七三頁）

御書の中にこのような一節があります。

心の財を積むのは、仏道修行の領域ですが、身の財・蔵の財は我われ個々の努力で何とか守っていけます。

私は職業柄、蔵の財、中でも「家財」（＝家）の守り方を、許す限り毎号『恵日』の紙面を通して記し、皆さまの一助に資したいと思い筆を執りました。

今回は初回ですから、前書きのようになりますが、次回から家屋内外の「点検」「補修」「修理」等について、分割的に寄稿して、ともに考えていきたいと思います。

＊　＊　＊

近年（戦後）我われの住む家は、材質も建て方も多様化し、居住様式も昔の木造一辺倒から大きく様変わりしております。鉄筋あり、鉄骨ヘーベルあり、木造あり、ツーバイ工法ありですが、何れも快適で安心して住みたいとの願いは、皆同じであると思います。どこまでご期待に応えられるかわかりませんが、私の知り得た知識と体験を元に、素人の方々が施工されることを基本にアドバイスしたいとおもいます。

また、工具・用具の使い方や用材の使い方にも言及していきますが、何れにしても専門家（工務店等）に依頼される前に、ご自分で挑戦されてみてはいかがでしょうか。

ちょっと寄り道 ㉖

小さな看板

伯耆の里　もりたかんどう

お寺のブロック塀の外に、「パソコン教室　ほうき塾」という小さな看板を出したのは、総代会で了承があってから、ちょうど二年後の四月であった。その時の情況からすれば、二年間の空白があったのはやむを得ないであろう。こころ急ぐ旅ではない。

近所の看板屋さんに、縦二〇㎝×横一一〇㎝の青地のトタンに、白の丸ゴシックで書いてもらった。字はカッティングマシンという機械で書いたというから、つくってもらったというのが正しいかもしれない。看板屋さんがネジで看板を取りつけているのを見て、教室誕生の実感がわいてきた。

教室の名前を「ほうき塾」としたのはやわらかくてシンプルだからである。このネーミングはすんなり決まった。しかし多少の思い入れはある。

この地には、かつての伯耆の国の国府があった。その地名をつかうのだから、さして芸はない。とうぜん、このあたりでは伯耆という名称は多い。市民の憩いの施設が「伯耆しあわせの里」といい、ゴミ焼却場が「伯耆リサイクルセンター」である。大山という山が古くから「伯耆富士」という名で親しまれているのはいうまでもない。

しかし、単に地名からだけでなく、日興上人を開祖と仰ぐ我われは、日興上人が伯耆房と称されていたことから、伯耆という名にひときわ親しみがある。ちなみにここには、「伯耆房」というお菓子があったり、「伯耆富士」と称する銘酒があったりで、私にとっては幾重にもうれしい土地柄なのである。

ところで、お寺にはどこも山号がついて〇〇山〇〇寺という言い方をする。うちは法城山という。この読み方が、地名から、また日興門流からも「ほうき」と読むのが妥当かと、あらためて気づいた。

あやかったことは他にもある。松下村塾や適塾のような私塾が新しい時代を切り開く柔軟な思想をもった逸材、つまり宝器を数多く輩出したことは周知のとおり。福沢諭吉が若いころ学んだ適塾の、よく遊びよく学びの塾風はずいぶん魅力的である。パソコンでよく遊びよく学ぶ、そんな柔軟な心を養っていただけたらと、ささやかにそう願った。

そうして、ふだんあまり仏法と縁のない若い方々が、パソコンを習いにお寺に通うことで、少しでも仏法に関心をもっていただければ、それこそ望外の喜びとするものである。

（大安寺住職）

盛大に奉修された御大会式

日蓮大聖人の滅不滅をお祝いする

宗祖日蓮大聖人御大会式を厳粛に奉修

昨年に続き十一月とは思えぬ、暖かな陽気の中、恒例の宗祖日蓮大聖人御大会式法要が十一月八（土）・九（日）日の両日にわたり、厳粛に奉修されました。

まず御逮夜法要では、定刻に出仕鈴が打たれ如法に進められた。「而説偈言」で馨がはいると、日有上人（成田執事）の申状より捧読が始まり、次でご住職の立正安国論、大聖人申状（信朝房）、さらには講中代表が日興上人（尾林講頭）日目上人（山本副講頭）日道上人（橋本副講頭）日行上人（太田会計幹事）とつづきましたが、みな経験者とあって、落ち着き払い音吐朗々と捧読がなされました。

講演には、興風談所の渡辺信朝師が登壇されました。ご存じのように、信朝師は学生時代を源立寺に在勤され、新説補任式も当寺において執行されましたので、古くからの法華講員には、懐かしさも格別だったようです。

講演に引き続き、恒例のお題目講が終了すると、しばし歓談の座が設けられ、ご住職の用意された寿司やビールで、楽しい一時を過ごしました。

翌、御正当会当日は、午前中から婦人部役員の諸準備、さらに十一時からは地区役員による、ご供物の袋詰めなどが行われ、午後二時の法要前までに準備万端を済ませて、教区ご住職方の来寺が待たれました。

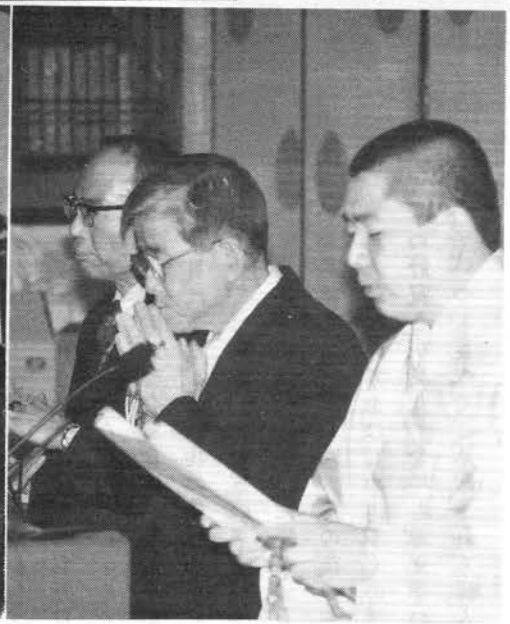
当日の講演は御逮夜に続き、もと源立寺の執事さんで五條市妙観院の山崎潤道師がお話下さいました。その後のお花くずしから、後片づけには、設営準備に奮闘された諸役の方をはじめ、多くの講員が獅子奮迅の力を発揮し、夕刻には常と変わらぬ静寂さが戻り、今年も源立寺のお大会式法要は、無事盛大に奉修されました。

いつも裏方でご活躍される婦人部、青年部、諸役員の方々、誠にご苦労様でした。

お花作り

音吐朗々と申状を捧読 ⇙
お花は真心込めて作りました ⇐

御逮夜



受付にて ⇓

ご住職による献膳の儀⇒
「立正安国論」の捧読⇓

フォト・アイ
《お会式》

御正当会

⇓　このお花をタンスに入れておくと衣装が増えるって本当？（お花くずし）

御会式布教講演（要旨）

妙法の智水を受持し伝えよう

妙観院主管　山崎潤道

「秋元御書」に曰く、

「三世十方の仏は必ず妙法蓮華経の五字を種として仏になり給へり。南無阿弥陀仏は仏種にはあらず。真言五戒等も種ならず。能く能く此の事を習ひ給べし。是は雑なり。此の覆・漏・汙・雑の四の失を離れて候器をば完器と申してまたき器なり。塹・つつみ漏らざれば水失る事なし。信心のこころ全ければ平等大慧の智水乾く事なし。」（全集一〇七二頁）

《御会式の意義》

皆さまこんにちは。

ただ今は読経・唱題・申状捧読をいたしまして、源立寺のお会式が盛大に執り行われまして、まことにおめでとうございます。お寺の年中行事の中で、また信心する我われにとっても、最も大切な行事であります宗祖大聖人様の滅不滅をお祝いするお会式が、このように盛大に奉修されましたのは、常日頃のご住職のご指導はもちろんのこと、講中の皆さまのご信心の賜物であると確信するものであります。

私は、奈良県五條市の妙観院でご奉公させていただいております山崎潤道と申します。

先ずはじめに、お会式を奉修する一番の意義は何であるかと申しますと、日蓮大聖人さまのご法魂の滅不滅にして三世常住たることをお祝いするということであり、また同時に私たち一切衆生の妙法の仏性が、滅不滅であるということをお祝いするのがお会式であるということであります。

この末法の世において、一切衆生の成仏は、日蓮大聖人様の唱えられた南無妙法蓮華経の題目を、受持し唱えることによって適うのであります。法華経の道理以外の、他の人師・論師の教えでは、決して末法という時と私たちの機根とに適うものではありません。その正法を示された大聖人様の、お会式のこのめでたい日に、一切の私利私欲から離れて、大聖人様の不滅の仏法をお祝いし、お互いの仏性を祝いあい、そして生涯謗法厳戒を心肝に染め、この仏法を修行していくことを誓い合いたいものであります。

《秋元御書（筒御器抄）》

さて、はじめに拝読いたしました御書は、「秋元御書」でありまして、別名を「筒御器抄」といわれ、弘安三年正月、大

聖人様が御歳五十九歳の時のご消息であります。

この御書は、秋元太郎兵衛尉というご信徒に与えられたものでありますが、この信者は下総の国（現在の千葉県印旛郡）に住んでおられた方で、大聖人様が文応元年に起きた松葉谷の法難を避けて、下総中山という所にいかれた折に、大聖人様より教化された方であるといわれております。

この秋元さんが、身延におられる大聖人様の元へ筒御器（竹筒の形をした器で、酒や水を入れたりする容器）を九十ほど御供養されて、そのお礼に対する御返事なのであります。

この御書の冒頭に、

「筒御器一具（付三十）並に盞（付六十）送り給び候ひ畢んぬ。御器と申すはうつはものと読み候。大地くぼければ水たまる。青天浄ければ月澄めり。月出でぬれば水浄し。雨降れば草木昌へたり。器は大地のくぼきが如し。水たまるは池に水の入るが如し。月の影を浮ぶるは法華経の我等が身に入らせ給ふが如し。」（全集一〇七一頁）

とありますように、大地がくぼんだ所へ、雨が降って水が溜まると小さな池になります。雨が上がって雲間から月が出るとその池の水に月が映ります。月が映る水はよく澄んでいます。また雨の恵みをもらって、草木が生き生きとしてきます。

このことを大聖人様は、秋元殿が御供養された器に譬えられて、器のくぼみは大地がくぼんでできた池のごとくであり、器に水が溜まる姿は池に水が入るごとくであり、池に月が映る姿は法華経が私たちの身に入るがごとくであると仰せなのであります。

講演される山崎潤道師

大聖人様はこのように、ご信徒からの御供養の志しに対して、事細かにご法門のお話を添えながら、丁重なるご返事を認めておられます。このお手紙にも、大聖人様の細やかなお心遣いが随所に見られるのであり、当時大聖人様からこのようなお手紙をいただかれたご信者さんたちは、とても幸せだなあと思います。しかし、ただうらやましく思っていても自分のものになるものでもありません。そこで大聖人様が与えられた御書やあらゆるご信徒へのご消息は、すべて後世の我われにも与えられたものであると考えて、自らの信心の糧としていくことが大切であります。当時のご信徒がそれほどの信心を常に心掛けていたということに目を向けて、私たちも自分のこととして学んでいくという姿勢が大切であります。

《器の四つの失》

先ほどの御書の続きに、「器に四の失あり」と、器には四つの失があると仰せであります。失とは、過失・過ちのことでありますが、その第一が、先ず、

「一には覆と申してうつぶけるなり。又はくつがへす、又は蓋をおほふなり。」（同）

とある「覆」であります。これは転覆するとか、覆うと読みますように、倒れたり逆さになったり、蓋で覆われるということであります。倒れたり逆さになれば、中の水

などこぼれますし、蓋をされれば中のものが使えなくなってしまいます。

次に、

「二には漏と申して水もるなり。」（同）

第二には「漏」で漏れるということで、器に穴があいたり、ヒビが入りますと水や酒が漏れてしまいます。

第三に、

「三には汙と申してけがれたるなり。水浄けれども糞の入りたる器の水をば用ゆる事なし。」（同）

第三には「汙」で、汚れるということで、入れる水は清浄でも器の中に糞が入っていれば、その器の水を使う人はいないということです。

最後に、

「四には雑なり。飯に或は糞、或は石、或は沙、或は土なんどを雑へぬれば人食ふ事なし。」（同）

第四が「雑」であります。器に盛ったご飯の中に糞とか石や砂が混ざっていれば、誰もその器でご飯を食べようとしないということです。

このように四つの例を挙げられて、器の失とされた大聖人様でありますが、これらの器の話を通して、実は衆生の身心を器に譬えられて、私たちの心の油断を指摘され、信心の誡めとされているのであります。すなわち、

「器は我等が身心を表す。我等が心は器の如し。口も器、耳も器なり。」（同）

と仰せのごとく、私たちが仏の説かれる法を正直に聞いて、信じて、唱えることがいかに難しいことであるかを、ご教示されているのであります。

筒御器の一種：行器（ぼかい）

器に溜まる水というのは、仏の智恵の水であり、仏は衆生の心という器に、説法教化して法華経の水を入れて下さっているのでありますが、衆生の中には「入りません」といって突き返したり、仏の説法を聞かないように左右の耳を手で覆ったり、あるいは口で妙法を唱えずに吐き出してしまう人がおります。これが「覆」という器の第一の失にあたります。

次に仏の説法を聞いて、少し信じる心が生じても、悪縁に遇うとすぐに信心が薄くなってしまい、信仰を捨ててしまう人や、信じる日もあるけれども捨てる月もある、一日信じて一月信じないという人もあるようですが、このような信心の状態が「漏」であり、器に穴が開いていたり、ヒビが入って水が漏れている状態に等しいのであります。

また次に、法華経を信じて修行しているといいながら、一口目には南無妙法蓮華経と唱え、二口目には南無阿弥陀仏と唱えるような人もいます。このような人は、ちょうど糞が入った容器に水を汲んで飲んでいるのと同じことであり、またはご飯の中に砂や石を混ぜて食べているのと同様で、これは「汙」と「雑」の失にあたるのであります。

大聖人様の教えも有り難いが念仏も悪いことはない、あっちのお稲荷さんも御利益がありそうだ、ということになって仏と神を混同してしまっては、成仏どころの話ではないのであります。

内房の尼という大聖人様の俗弟子が、八幡の氏神神社に参るついでに身延の大聖人

様のもとへ参詣しようとしたので、大聖人様は母親ほども歳の違うその尼さんを叱り、追い返したということが御書にでております。これは大聖人様の人情からすれば心苦しかったことでしょうが、信仰の筋目を糾す意味において、そのような厳しい態度をとられたのだと思います。

大聖人様はこれらの話を通して、

「信心のこころ全ければ平等大慧の智水乾く事なし。」（全集一〇七二頁）

と仰せになって、器に覆・漏・汙・雑の四つの失があるけれども、「今秋元さん、あなたが御供養された器は、硬くて厚い上に、漆がまんべんなく清く塗られており、これはあなたの法華経の題目を信ずる力が堅固であることを表しているようです」と、篤信の志をお褒めになっているのであります。

信仰が清浄であれば、その信心から現れる御供養の志も清浄であります。つまり作りもどっしりしていて、塗りのしっかりとした器を完器というのと同様に、何事があっても、信心がぐらつかない人は、平等大慧の智水が乾かないということであります。

《妙法の智水を伝えよう》

この平等大慧の智水というのは、一切衆生の成仏を説く法華経の精神であり、妙法の慈悲であります。この智水は決して枯れることはありません。しかし、信仰者の心掛けが悪ければ、智水の入った器にヒビが入り、穴が開き、不浄なものが混ざって、せっかくの智水を台無しにしてしまうことになりかねません。

幸いなことに私たちは、自分の信心の器にいつも目を配り、蓋がされたままになっていないか、あるいは混ざりものがないか、ヒビが入ってないかということを常に点検できるようになりました。毎日毎日点検を怠らず、しっかりとした器で、大聖人様・日興上人様以来の妙法の智水をこぼさないように、大事に受持し、伝えていかなくてはなりません。大聖人様以来の法の智水をあくまで、私たち正信会僧俗の清浄なる信心でもって伝えるべく、精進していかなくてはならないのであります。

以上をもちまして、本日のお話とさせて頂きます。源立寺と源立寺法華講が益々発展されますよう、お祈り申し上げます。

【師走詠草】

〔橋本 義一〕
朝毎に　ポストにあふるる　広告紙
資源の濫費　歌に託さん

高野龍神　スカイラインを　越え行けば
織りなす錦　思わず絶叫

〔橋本 圓子〕
十二月八日は歴史の彼方なる
バールハーバー　知る人少し

真夜中に　うなされ叫ぶ　夫の声
わが家の戦後　未だ終らず

〔坂本 フミ子〕
シンフォニー聴きたる帰路のバス停に
綺羅星の如き　イルミネーション

さしのぶる　母の手許を　見定めて
幼は滑り台の　頂きに立つ

〔山田 絢子〕
庭先の　エンジの小菊　花房に
顔を埋めて　母の香を恋う

【恵日俳壇】

〔宮下 留代〕
秋惜しむ　日差し掌にとめ　じっと見る
秋惜しむ　故里なつかし　土佐の山

「わが人生観」との副題が付してある本書には、戦前戦後の文学界をリードし、多くの読者を魅了した作品を送り出した偉大な作家吉川英治氏の、その数多い作品の中で語った人生観が綴られている。

そこには、生い立ちや作家の足どり、それに宗教観などが紹介されていて、あらためて作品一つひとつに、著者の人生観が反映していると気付かされる。

とくに「ぼくは恋愛らしい恋愛をしたことがない」と語った著者が、『宮本武蔵』『親鸞』の二つの作品では、お通さんと玉日姫という二人を悩ます女性を登場させている。この作品を書き始めたのが昭和十年。じつはこの時期、池戸文子という後に再婚する一人の女性、それも十代の乙女に四十代の著者は心を引かれていた。

著者の心を悩ますその乙女は、吉川文学を代表する作品の中に登場し活躍する。一人の乙女への想いが、そのまま作品に生かされているところに、同じく悩みや苦しみをかかえた多くの人びとの心を掴んでいった、その秘決があるのだろう。

また、「僕の歴史小説観」三編には、著者が歴史から何を学び、また作品を通して何を訴えようとしていたか、興味深いことが語られている。なかでも代表する長編作品「新平家物語」への語りは、心にずしりと響く。

読書案内

松田銘道

吉川英治著

『われ以外みなわが師』

大和出版

八〇〇円

この作品では、保元の乱、平治の乱の様相を実に生々しく書き続けたが、それは次のような著者の思いと願いが込められていたからだ。

「私はこの二つの乱をみ、また書きながら、いつも途中で胸が痛くなってこたえられなくなる。こんな恐ろしい、むごたらしいことがあるかと思われるのです。というのは正にこの二つの戦いこそ骨肉相食む戦いだからであります。……その骨肉同志の戦い、けんか、葛藤が、幾百年後の今なお、今日のジャーナリズムの上に別な姿と形においてみる時、私は何かたまらない気持ちになるのであります。」

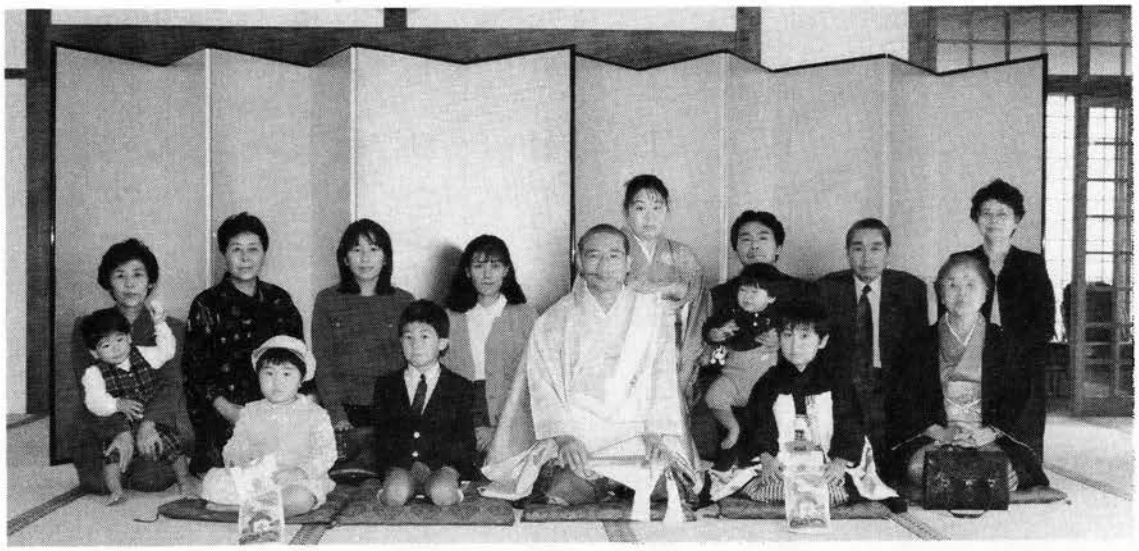
歴史はただ過ぎ去った時代の姿ではない。今生きているこの世の姿そのものだと感じていたがゆえに、今生きている人生をどうしたら意義あるものとすることができるのか、そんな願いを人びとに語りかけていたのだ。

人と人が争うその愚を、三国志の中に出てくる〝七歩の詩〟をいつも思い起こしながら、自ら戒めていたという。その詩は次のように語りかけている。

「豆を煮るに豆の豆がらをたく　相煮ること
の何ぞ急なる　釜中の豆ふつふつ泣く　元こ
れ同根より生ずるを」

大好きで、いつも愛誦していたという。吉川文学の源泉は、ここから湧き出ていたに違いない。

（正覚院主管）



ご住職と一緒にパチリ！（七五三祝詣り）

恵日だより

目師会（七五三祝い）

十一月十五日（土）

恒例の目師会が、十五日の午後七時より奉修され、献膳、読経、唱題と進められ、その後にお説法がありました。

また、これに先立つ午後一時には、七五三祝いが行われ、読経の後、ご住職より御本尊頂戴の儀があり、七五三をお祝いしました。

祝　七五三

藤岡涼くん　七歳　豊中市
野口毅くん　五歳　堺市
津村亮祐くん　五歳　吹田市
津村駿也くん　三歳　吹田市
坂本くららさん　三歳　吹田市
西嶋綾香さん　七歳　神戸市
東野侑子さん　七歳　豊中市

おめでとうございます。

関西婦人大会準備委員会開催

十一月三十日、森ノ宮・アピオ大阪で開催の、関西正信連合会婦人大会の最終打ち合わせが、二十二日の午後一時から源立寺本堂で開かれました。

今年は三教区（北近畿、南近畿、兵庫）合同の大会となり、山本収副講頭が連合会長に就任されたため、十月五日（日）に続いての源立寺での開催で、この日は最終段階の確認が行われました。

朝からあいにくの雨模様でしたが、普妙寺・石川広覚尊師、実相寺・榎本裕道尊師をお招きし、各教区の代表委員が約二時間半にわたり、何度も検討事項を確認されました。

参加した関係各委員の熱意は、大会開催の成功を予感させるに充分なものでした。

十二月の行事

一日（月）　午後二時　お経日

七日（日）　午前八時　講中勤行会・幹事会

八日（月）　午前十一時　広基寺御大会式

十三日（土）　午後一時　お講

十四日（日）　午後一時　お講・役員会

二十一日（日）　午前十時　年末大掃除

※十二月一日の継命新聞の発送は、『旭丘・緑丘』が担当地区です。
※今月は、継命新聞の新年号を年末に発送します。
担当は『蛍池・服部』地区です。

※宅お講の申し込みは、源立寺までお願いします
締め切りは、毎月二十日です

恵日

平成九年十二月号　通巻三十四号
平成九年十二月一日発行

編集兼発行人　菅野憲道

発行　恵日編集室

〒五六三　池田市槻木町一―一〇　源立寺内
TEL（〇七二七）五一―三一三五
E-Mail：genn@wombat.or.jp
BBS：PXH05170（NIFTY）　BMC92733（PCVAN）

恵日　十二月号　通巻三四号　平成九年十二月一日発行（毎月一回一日発行）
編集兼発行人　菅野憲道　発行所　〒五六三　池田市槻木町一―一〇　源立寺内　恵日編集室
定価一〇〇円